

令和 8 年度
第 3 学年

誠 実

中野区立第二中学校
令和8年 5月 1日
学年通信 5 号

東京のつま先

先週末のことです。学年通信を通じてお話させていただいているアメリカのアメリカンフットボールリーグ“NFL”でドラフト会議が行われました。今回はその一場面を紹介します。

鈴木誠也選手に代表される日本人の野球選手がメジャーリーグで活躍する昨今、NBA バスケットボールでも八村塁選手が活躍し、それぞれ本場のアメリカでチームの中心となって勝利に貢献する日本人が増えてきました。サッカーの本場欧州でも日本人の活躍は目まぐるしいのだと思います。そんな中、未だ日本人が到達できていない場所があります。それが、NFL アメリカンフットボールの世界です。日本人がドラフトに掛かったことは一度もなく、もちろん公式戦に出場したことすらありません。すでに100年に達しようとしている NFL の歴史の中で日本人が今まで1人たりとも成しえおらず、達した場合には日本スポーツ史に残る大偉業なのです。

そんな NFL のドラフト会議に、1人の日本人が挑みました。松澤寛政(まつざわかんせい)選手です。ポジションはキッカー。ハワイ大学に所属する松澤選手はキッカーという特殊なポジションで NFL の分厚い扉を右足一本でこじ開けようとしていたのです。

そもそも、キッカーというポジションはアメリカンフットボールの中でも、特別なポジションと言われています。試合時間の95%をサイドラインで過ごし、キックで得点を狙う場合にフィールドに出てきます。「キックは決めて当たり前」という期待の中、ゴールポストに向かって楕円形のボールを蹴り込みます。「入って当然」、「外したら戦犯」と呼ばれることもしばしばあり、ボールを遠くに精密に飛ばす能力に加えて、プレッシャーをものともしない強心臓も求められます。チームが戦ってきた終盤に、キックを決めれば勝ちというシチュエーションで、「決めて当然」の期待を一身に背負うことから、あるスポーツ紙の調査では全米で一番就きたくない職業に何年も連続して選ばれているほどです。

そんなキックを生業とし、松澤選手は大学のリーグ戦でキックを決め続けてきました。リーグ最終戦、大学生活最後の試合でも1本も外さずにキッカーを努めました。大学で1年間通して活躍した松澤選手は大学 No.1キッカーの評価を受け、ドラフト会議に臨みました。そんな彼を地元メディアは「TOKYO Toe (東京のつま先)」と呼んでいます。

松澤選手は高校までサッカーをやっていたそうです。高校卒業後に渡米し、何の気なしに観戦した NFL の試合でアメフトの魅力に引き込まれました。そして、サッカーで培ったキック力を活かし、20歳になってから「独学」でアメフトを始めました。その後、23年に編入したハワイ大学で25年にブレイクを果たします。そして、27歳の今年、NFL のドラフトに挑みました。現地の選手が幼少期から楕円形のボールに親しんでいることから考えると、松澤選手の経歴は異例です。

3日間にわたって行われたドラフト会議で松澤選手の名前が呼ばれることはありませんでしたが、道は開かれました。ドラフト会議の後に行われる会議で、ドラフト外選手としてラスベガス・レイダースというチームと契約をしたのです。偶然、高校卒業後に初めて観戦したのもレイダースでした。松澤選手の人生を変えることになったチームが、今度は自分の道を拓くチームになったのです。

今後はレイダースのミニキャンプなどに参加し、開幕ロースター(選手登録枠)入りの53人を目指します。秋の開幕を見据え、勝負となるのは夏のキャンプです。ここでも結果を残し続ければ、日本人初の NFL 選手が誕生します。

松澤選手は言います「何かに挑戦するとき、“遅い”ということはない」と。

まずは勝負の夏です。夏の競争を乗り越え、1つしかないキッカーの枠を勝ち取ったとき、「TOKYO Toe」が NFL の世界で活躍する瞬間がこの秋やってくるかもしれません。その瞬間を応援して待ちたいと思います。

皆さんは今後の人生でいくつかの挑戦をすることになると思います。何かを成し遂げる必要がでてきます。それは自分のためかもしれませんが、周りのために取り組むのかもしれないかもしれません。それでも、「始めるのが遅かった」ということはないのではないのでしょうか。

何歳になっても挑戦はすべきなのだと思えます。私は、とても楽しみにしていた今年のドラフト会議を現地言語“英語”の副音声で見ました。私も英語に挑戦中です。内容が全然分からなかったけどね。

